

槐

かい

岡井省二創刊

平成26年11月号

平成二十六年十一月一日発行 第二十四卷第十号 通巻第一八一号(毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



秋 天

高橋将夫

牛蒡引く力加減は土に聞く
決められし道をひたすら秋遍路

脳裡には秋天入るる広さあり

「俳句」九月号より八句

何一つ秋の空には隠せない



御仏のためには粧ふ比叡山
縦のもの横にしただけ捨案山子
鬼の子はさらつてゆかぬ鬼子母神
銀河への大航海の時代来る
登高す古い先見ゆるところまで
自づから秋の音となる秋風鈴
袋小路にも秋天は高くあり



槐安集

水野恒彦

流さるる精霊舟の遙かな灯
去るものにとどまるものに銀河濃し
邯鄲のこゑ月光をのぼるらし
かまつかに胸中の火を移しけり
きはちすや翁の遊び我もして

加藤みき

射撃場の跡真葛原昼の闇
昆布干す赤子に背^ヲを蹴られつつ
奉書の上にサフランの花乾燥す
磯菊にジェットエンジン響きたり
桔梗のあふるる乳を手^ヲにうけて

中島陽華

末広や夏の座敷の子らがこゑ
弘子持つ僧の立ちたる夜の秋
楊梅の降る呟きの中なりき
汗かくや昼はいかすみパスターを
花子ゐて西の大山蛇泳ぐ

竹内悦子

貴婦人のレインハットや蟬しぐれ
打水や長命館は湯屋の前
白桃の届きし夜の波羅蜜多
百日紅葬りの帯を解きにけり
もぢずりや句集にありし乳と臍



雨村敏子

風神も雷神も来よ祭笛
肩甲骨美し真夏の水しづき
八月のここにまた会ふ空の青
干梅をとり込んでをる夜風かな
ももいろの鉢巻洗ふ祭あと

本多俊子

金風といひてくちびる光るなり
笑ふたびこころの奥のきりぎりす
遠い日の空を見てをり敗戦日
なでしこといへば青春瞬けり
たつぷりと櫂の木濡らす魂迎

近藤喜子

ほこほこと光を舐めて秋の蛇
蒼天に溺れてゐたる昼の月
秋水の底は鏡でありしかな
石ひとつ世を遠くする曼珠沙華
秋の蝶いとしきものを追ふやうに

瀬川公馨

蟻の目に百合のてつぺん五千尺
テルテル坊主桂川にて夕涼み
門前払ひくらつてゐたり盆回向
からつぽのムーミン谷に蛾の炎舞
冬瓜の翡翠を極めぬたりけり

久保東海司

念佛の声まで濡らす盆の雨
寄り添ひし男女動かぬ川床涼し
風死して闇を動かす牛蛙
現し世の音は聴こえず滝の前
開き切るまでのときめき水中花

柳川 晋

浅漬けを切る音澄めり晩夏光
手を揚げて笑ふとそれが踊かな
久米仙といふ泡盛に舞ひ落つる
墓洗ふやうに父の手をさする
法師蟬恋ひし尽くしと鳴いてをり

岩下芳子

海の皺大きく伸びて土用波
天と地のひと色となる草いきれ
ラムネ一本飲み干しラムネ玉残る
大阪の蟻階段を登りけり
天空に虹の水引掛けにけり

近藤紀子

八朔の水の匂ひや山の影
羅の母ぬてお目ざのおやつかな
佛さんにと鶏頭を持って来たり
烏瓜の花いづ方の誰の手に
並べある祭提灯絵金かな

岩月優美子

儂さを知らず蝸鳴きにけり
大花野友あり知あり愛のあり
鶏頭のまだ鶏頭になりきれず
こんな夜はミュージズ現る星明り
茫茫と八月尽の己が影

竹中一花

赤赤と燃ゆる哀しび大文字
木の高さ草の低さや小鳥来る
省二在す空へ空へと烏瓜
産土神へ供ふる秋の香りかな
紫の花叢にある蛇の道



槐市集

熊安寺石庭

有松洋子

十五個の石のしづけさ天の川
若人に悲恋うつくし天の川
秋光や松に苔むす村の道
死ぬ前は草木となれ秋の風
初秋の朝のたましひやはらかし

犬塚芳子

雑念を払うてくれる蟬しぐれ
金魚掬ひ息をのんでる子供かな
孟蘭盆経夕べの空へ鉦びびく
孟蘭盆会一族の顔きらきらす
近よれば木槿は白を極めをり

犬塚李里子

思ほへど詮なきことや落し水
明日のこと明日にまかせて川芒
川蜻蛉虚空漂ふ気の流れ
秋霖や独りといふを噛みしむる
仏桑華しづかに一日過ぎにけり

井上静子

朝ぐもり活花の水替へてをる
秋暑し刻のずれたる路線バス
風旨し峠の茶屋のかき氷
森林のブルーベリーの籠に降る
寺に行く道真直ぐなり百舌鳥の声



今井 充子

炎昼や郵便受けの音を待つ
鮎跳ねて父の笑顔の夜明けかな
道真中の蝦蟇^が踏ん張つて通せんぼ
葉鶏頭や画板に絵の具流しける
玄関に二つ置かれし夏帽子

江島 照美

謳歌する命ありけり蟬時雨
星月夜記念写真の中の人
生身魂語らぬままに通じ合ふ
真夏日に初雪草の咲きにけり
かはたれに切れ良く飛びし赤とんぼ

岡田 桃子

日中の熱の遣り場や西瓜喰ぶ
体内の気管支しかと夏の風邪
団扇風しやべるクマモン挟みては
鞍掛山を狙ふ三すじの稲光
百年の漆の家に扇風機

熊川 暁子

おしろいの真つ盛り保母の素顔かな
心根を思うてゐたり水中花
青田みな穂を持つ色に吹かれをり
砂日傘もう夕日しかゐぬ浜に
うらがへるときが命の果てし蟬

後藤 マツエ

鳴き尽したる蟬の骸の軽きこと
夜濯ぎやロープを掛けし三日月
空蟬の頭を下げし父祖の墓
十葉の花を夜風の揺らし行く
恋に酔ふ蟬に晩夏のしのび寄る

阪倉 孝子

炮烙灸ふはりとかはす物忘れ
シャンプーの香りの中に花火待つ
千鳥がけつくろうてをりちちろ鳴く
金色の雲のふち取り稲の花
涼新た丸き言の葉ありにけり

槐集

高橋将夫選

イクメンの涼しく吾子を抱きにける
撰津 中田 禎子

口々に大発見を日焼けの子
金色祝の東山なり夏座敷

鯖雲や仏に紅のありにける
大木の命あずかる夕立かな

白桃のひかりを吸ひし重さかな
秋の蝶散華のごとく舞ひ落ちる
大阪 有松 洋子

踊りの輪はづれて闇へ還る魂
人波の一瞬とぎれ秋の風

秋風の吹きて星座の上がりけり
水撒いてそこより刻の解かれゆく
枚方 熊川 暁子

尺とりの休みたきとき枝となる
マロニエの軒借るパリの白雨かな

根の国を出で来し墓の仏がほ
風の字の溢れ風なき風の盆

かなかなのこゑに火の付く恋心
大阪 江島 照美

楽しめて二夜三夜なる一夜酒
はたた神弛む心に喝入れて

盆の月身の内にある消せぬこと
墓洗ふやがて無縁となる墓を

犬釘の浮き上がりたる油照
蟻塚の出払つている正午かな
京都 中林 晴雄

暗がりの戦争動く溽暑かな
地藏会の大数珠操りの小さき手

山粧ふ卑弥呼の鏡懐に
灯籠の袖振り合うてゆづりあふ
福井 時澤 藍

絵日記の仕上げはいつも雲の峯
木の生血吸ふも生業凌霄花

暑いから許したふりをしてをりぬ
何もかも黙視のすがた秋簾

銀河往来

高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

イクメンの涼しく吾子を抱きにける 中田 禎子
季語の「涼しく」がよく効いていて、卑近な素材が自然体で表現されているところが心地よい。

〈口々に大発見を日焼けの子〉の句からは、好奇心旺盛で元氣な子らの夏休みの情景がよく伝わってくる。

〈大木の命あずかる夕立かな〉の句、大木ともなると夏には夕立ほどの水が必要なのだ。

踊りの輪はづれて闇へ還る魂 有松 洋子
魂が闇へ帰ったということは、踊りの輪に何かの魂が紛れ込んでいたということ。お盆の時期で、しかも薄暗い盆踊りの景だけに、ありそうな怖い話。

一転して、〈白桃のひかりを吸ひし重さかな〉と〈秋風の吹きて星座の上がりけり〉の句では、作者の豊かな感性が遺憾なく発揮されている。〈人波の一瞬とぎれ秋の風〉の句は、人波がとぎれた一瞬を繊細な感受性で捉えている。

水撒いてそこより刻の解かれゆく 熊川 曉子
打ち水に路面が濡れて、刻々と乾いていく。そんな時間の経過を「刻が解かれる」と詠んだ。作者ならではの表現と思う。〈風の字の溢れ風なき風の盆〉は、あちこちに溢れる幟やポスター等の「風の盆」の「風」の文字にもかかわらず、無風状

態の景。いきれの暑さがじんわりと伝わってくるが、「風」「風」「風」のリフレインで救われる。〈マロニエの軒借るパリの白雨かな〉、雨宿りに借りた軒がマロニエというのがいかにもパリ。夕立を白雨としたのも見事。〈尺どりの休みたきとき枝となる〉の視点もおもしろい。

かなかなのこゑに火の付く恋心 江島 照美
蝸や法師蟬が鳴くと、夏も終わりなのだど淋しくなる。ところが、作者は恋心に火がつくという。なるほど、「かなかなかな」のリズミカルで高音の鳴き声はそんな感じにも聞こえてきて、気持ちの若返る一句。しかし、一方では、〈墓洗ふやがて無縁となる墓を〉のような現実もあるのだ。

山粧ふ卑弥呼の鏡懐に 中林 晴雄
美しく紅葉した山が懐に卑弥呼の鏡を抱いているという。実にロマンに満ちた広がりのある一句。一方、〈犬釘の浮き上がりたる油照〉の句では、炎熱でレールが延びて、レールを枕木に固定する犬釘が浮くというリアルに怖い精神の風景。〈蟻塚の出払つてゐる正午かな〉の句は、蟻も出払っているという着眼がいかに俳諧的で、蟻塚の本質に迫っている。

暑いから許したふりをしてをりぬ 時澤 藍
許せないのだが、とにかく暑くて、この場はこれでお茶をにごしておこうというわけである。心の機微を実にうまく表現したと感心させられた。〈灯籠の袖振り合うてゆずりあふ〉、〈何もかも黙視のすがた秋簾〉の句、いずれにも作者ならではの視点が感じられる精神の風景。(以下略)